

戦前日本のユダヤ認識とハルビン・ユダヤ人社会

高尾 千津子

要旨

19世紀末、中国東北部（満洲）に建設されたロシアの都市ハルビンには、ロシア革命直後には1万を超える極東最大のユダヤ人が住んでいた。1931年の満州事変と翌年の満洲国建国によって日本は中国大陸への侵略を開始し、中東鉄道沿線のロシア人社会を支配下に置いた。皮肉にもこの結果日本はロシアから「ユダヤ人問題」を引き継ぐことになった。

日本にはユダヤ人社会がほとんど存在しなかったため、反ユダヤ主義は欧米やロシアの「輸入品」であり、そのユダヤ人認識も一般には観念的なものと考えられる。だが、満洲国建国後日本は現実の「ユダヤ人問題」、すなわち反革命派ロシア人による反ユダヤ主義の問題に直面していた。本論ではハルビンにおけるロシア・ファシスト党の反ユダヤ主義、それに対抗するユダヤ人社会と指導者カウフマンの存在が、戦前日本におけるユダヤ人認識の形成と発展にいかに関与したのかを考察した。

キーワード

ハルビン、満洲国、ユダヤ人、反ユダヤ主義、シオニズム

はじめに

日本には長崎、神戸、横浜に小さなユダヤ人コミュニティが存在したが、日本人のユダヤ人認識の多くは実際のユダヤ人との直接体験から生じたものではない。明治以降の西洋文明の導入後、キリスト教ヨーロッパ世界のユダヤ観や、いわゆる「ユダヤ陰謀論」など現実のユダヤ人とは関係のない観念的なユダヤ人像が「教養」として入り込むことになった¹。とはいえ、日本のユダヤ人認識の形成に現実のユダヤ人との接触が影響を与えなかったわけではない。その舞台とは日本とロシアがせめぎ合った中国東北部—いわゆる「満洲」であり、1931年の満州事変と翌年の「満洲国」樹立後、10万を数えた「ロシア人」社会を日本が支配下に置いたとき、現実の「ユダヤ人問題」に直面したのである。

本稿では、満州進出と同時に図らずもユダヤ人を抱えた「満洲国」の「ユダヤ人問題」に対する日本の認識と政策に焦点をあて、ハルビンのユダヤ人社会と日本との関係について考察する。

1. ハルビンのユダヤ人社会—「極東のエルサレム」

帝政末期、極東の軍港ウラジオストクとモスクワを結ぶシベリア鉄道の短絡線として、帝政ロシアは中国東北部に全長 2,500 キロの東清鉄道（中東鉄道）敷設に着手した。この鉄道は日清戦争後の三国干渉で中国に恩を売ったロシアが獲得した利権であり、沿線は鉄道附属地としてロシアの治外法権下に置かれ、ロシア内地からの植民によっていくつもの都市が建設された。なかでも松花江（スنگアリ川）と鉄道の交点に位置したハルビンは、1898年の建都から間もなく、ロシアの極東進出の拠点となった。

帝政末期のロシアではユダヤ人は厳しい居住制限の下におかれ、ロシアのユダヤ人の圧倒的多数（520万中490万）は「ユダヤ人定住地域」（現在のベラルーシ、ウクライナ、リトアニア）とポーランドに集中していた。だがロシア帝国の満洲進出とハルビン建都から短期間のうちに、ユダヤ人は東方の辺境の地に確固たる経済的、社会的地位を築き上げた。1912年ハルビンで行われた人口調査によれば、ハルビンの「ロシア人」43,691人のうち、ユダヤ人は5,032人で11.5%を占めた。ロシア文化が色濃いハルビンではそこに住む人々も「ロシア人」とひとくくりになされがちだが、その内実はウクライナ人やタタール人、ユダヤ人、ドイツ人といった多様な民族的、宗教的出自を持つ人々であった。アジアに造られたロシア都市ハルビンは「東洋のモスクワ」や「東洋のパリ」などの形容で知られているが、ユダヤ人による回想のなかには「極東のエルサレム」といった表現に出会うことがある。ハルビンはアジアに突如現れた、ロシア・ユダヤ人の飛び地であった。

建都から間もなく、ヨーロッパロシアから遠く離れたこの極東の都市に、かくも多くのユダヤ人が引き寄せられたのはなぜであろうか。その背景は帝国境界のハルビンが帝政ロシアの「リベラルな側面」を代表する都市であったからである。中東鉄道沿線の経済発展を重視した大蔵大臣ウィッテの方針により、沿線ではユダヤ人の居住が合法化された。この結果多くの起業家精神に富んだユダヤ人が引き寄せられた²。鉄道が開通した 1903 年にはハルビン・ユダヤ人共同体が創設され、翌年にはロシア内地のオムスクから最初のラビが到来した。1903 年から 20 年まで中東鉄道長官であったドミトリー・Л・ホルヴァートの下で「幸福なホルヴァート王国」と形容されたハルビンには、内地とは異なる帝政ロシアの「寛容な」顔を見ることができる。

1904 年に勃発した日露戦争で、ハルビンは満洲におけるロシア陸軍の補給基地となり、軍需品を扱う業者から一攫千金を夢見る山師まで多くの人々を引きつけた。日露戦争ではロシア各地から 3 万に上るユダヤ人が徴集され、松山をはじめとする日本の捕虜収容所に収容されたロシア兵の中にも数多くのユダヤ人がいた³。日露戦争敗北と第一次ロシア革命の動乱のなかで、ロシア各地でポグロムが吹き荒れ、定住地域のユダヤ人共同体の多くが破壊された。復員したユダヤ人の中には、破壊された故郷に戻るのをやめ、ハルビンに居を定めて家族を呼び寄せる者も現れた⁴。

2. アブラハム・カウフマン

ハルビンのユダヤ人は、林業、製粉、アルコール製造業など地域産業の発展や資源開発にパイオニア的役割を演じた。スキデルスキー（林業、石炭採掘請負業）やカバルキン（大豆輸出業）をはじめ、ユダヤ系資本家は製糖業、製粉業、毛皮輸出業にも活躍し、1908 年に創設された市議会でも重要な役割を演じた。このハルビンのユダヤ社会を率いたのは 1919 年から 1945 年までハルビン・ユダヤ教団会長を務めた医師、アブラハム・カウフマン（1885-1971）である。

カウフマンは 1885 年、ユダヤ人定住地域のチェルニゴフ県のムグリンの裕福なユダヤ教正統派の家庭に生まれた。カウフマンはその回想のなかで「私の中にはハシディズムの熱狂が息づいている」と語っているが、カウフマンの母親は 18 世紀リトアニアで興ったユダヤ教神秘主義ハバド・ハシディズムの創始者シュネール・ザルマンの曾孫にあたるという。カウフマン 5 才の時に家族はロシア内地の都市ペルミに移住した。1903 年にギムナジウムを卒業後、ユダヤ人入学者数制限のためにカザン大学への入学がかなわなかったカウフマンは、スイスに留学し、1909 年に医師の資格を得た。ロシアに戻り、ペルミで医師として働く一方、

各地の地方都市でシオニズム運動の宣伝に携わった。カウフマンは 1912 年にハルビン到着後、多方面にわたる社会活動を開始し、ロシア革命後の内戦期から満洲国崩壊時までの四半世紀、ハルビンのユダヤ人社会の指導者となった。同時に彼はユダヤ民族基金、世界シオニスト機構、ユダヤ機関など主要なシオニスト組織の極東代表でもあった。1921 年から 1943 年までハルビンで発行されたロシア語ユダヤ系雑誌『エヴレイスカヤ・ジーズニ (ユダヤ人の生活)』の編集主幹を務め、「満洲国」建国後は 1937 年から 3 年連続で開催された「極東ユダヤ民族大会」の議長として日本の「ユダヤ人政策」を海外に向け発信し、1939 年には日本の招きで訪日して関係各局首脳部と会談するなど、日本人とユダヤ人の仲介役としていけば「シュタドラン」の役割を果たした。戦前日本の軍、政府当局のユダヤ人認識の形成にアブラハム・カウフマンはおおきな影響を与えた人物であった⁵。

3. 満洲国時代のハルビンの共同体と日本のユダヤ政策

3-1. ロシア・ファシスト党の反ユダヤ主義

1917 年 10 月のボリシェヴィキ革命によりロシアは革命派と反革命派とに引き裂かれた。極東、シベリアでも激しい戦闘が勃発し、幾度も支配者が入れ替わった。白衛軍の残党をはじめ多くの難民が世界各地に離散した。ベルリン、パリ、プラハと並んでこれら亡命ロシア人（しばしば「白系ロシア人」と形容された）の中心地となったのが極東のハルビンである。シベリアやロシア極東から中露国境を越えて満洲へ渡った亡命者は 20 万を超え、そこからアメリカやオーストラリア、上海など中国の都市へ渡る者も多かったが、大部分はハルビンに残留した。

ロシアから逃れた難民のなかには、もちろん多くのユダヤ人がいたし、ハルビンのユダヤ人社会は難民流入によって人口は 1 万数千にまでふくれあがった。ハルビンのユダヤ人共同体組織は、内戦によって荒廃したロシア内地からやってくる大量の難民を大急ぎで迎えることになる。1921 年頃までに、ハルビンの商業地区であるプリスタン（埠頭）地区には二つのシナゴグ、タルムード・トーラー、ユダヤ図書館、ギムナジウム、葬儀互助会、墓地、養老院、診療所、簡易食堂、グミレス・ヘセド（無利息融資機関）、難民救済機関、その他の充実した相互扶助組織が作られていった。こうした施設はプリスタンを南北に走る目抜き通りであるキタイスカヤ（中国大街）に、北のコメルチェスカヤ（商務街）と西のデヤゴナリーナヤ（斜文街）が交わる、一辺 1 キロ程の二等辺三角形内に集中している。

1917 年の 10 月革命後、「ボリシェヴィキの災禍」をユダヤ人と結びつけ、革命をユダヤ人の陰謀とする見解がロシア内外で急速に広まっていた。20 世紀初頭にロシアの秘密警察によって偽造された『シオン長老の議定書』が、ロシア革命と

「ユダヤの世界秩序の破壊」を予言したかのようににわかには脚光を浴び、この時期に世界各地に伝播したが、日本もその例外ではなかった⁶。シベリア出兵で白衛軍を支援した日本軍や日本の外交当局には、ポリシェヴィキとユダヤ人を結びつける情報が氾濫するが、なかでもハルビンの日本総領事館や軍当局から「白系ロシア人からの伝聞」という但し書きのもとで反ユダヤ情報が日本に大量に流入した。その反ポリシェヴィキ感情と一体化した反ユダヤ主義は、ハルビンのユダヤ人社会を脅かすことになる。

革命後の難民でふくれあがったハルビンは、極東最大の反革命派ロシア人の集結地となっていた。1927年1月にはソヴィエト体制の転覆と「神、民族、労働」のスローガンの下で、ファシスト独裁国家樹立を目的とするロシア人ファシスト組織が生まれ、1931年5月には複数のファシスト組織が集まり、ロシア・ファシスト党が結成された⁷。

1932年2月、関東軍はハルビン入城の際、当時組織されたばかりのロシア・ファシスト党を協力者として利用した。そしてこの直後からロシア・ファシスト党による身代金目的のユダヤ人拉致事件が頻発した。外務省記録によれば、1932年満洲国建国直後から富裕なユダヤ人商店主を狙った拉致事件が複数発生している。

中国東北部には以前からフンフーズと呼ばれた匪賊による身代金目的の誘拐が頻発していた。カウフマンは、日本軍がハルビンから中国人の匪賊を一掃した後、「黒百人組とロシア・ファシストの匪賊」がそれにとって代わったと回想している。

「(1933年)3月、ユダヤ人の社会活動家コフマンが誘拐された。彼は仕事から帰宅途中路上で拉致され、車で連れ去られ・・・拉致中に殺された。遺体は見つからなかった。二ヶ月後肉屋のグリーンベルグが誘拐された。・・・1932年10月のヨム・キプールの晩、商人シェテリの25才になる息子が匪賊によって拉致された。匪賊は彼をコーンナヤ通りで捕らえ、車に押し込んで逃走した。拉致されたシェテリは100日の間ずっと暗く湿ったほら穴の中でしばしば拷問を受け、25,000ドルの身代金で解放された。1937年5月にはハルビン新市街の井戸で商店主レオンソンの腐乱死体が見つかった。かれは匪賊によって1935年6月に身代金目的で拉致されていた。」⁸

1918年にハルビンに生まれ後にアメリカへ移民した歴史家のボリス・ブレスラーによれば、満洲事変後の日本の勢力拡大後、ハルビンは「寛容の都市」から「憎悪とハラズメントの都市」に変貌した⁹。ハルビンには1920年代初頭に1万数千人のユダヤ人が住んでいた。だが1932年の「満洲国」建国後、多くがハルビ

ンを去り、上海や天津に移り住み、1938年末にはハルビンに残るユダヤ人の数は2,251人にまで減少している¹⁰。

3-2. 「カスペ事件」の衝撃

こうした「匪賊」によるユダヤ人誘拐事件の背後には現地の警察当局が深く関与していた。ロシア・ファシスト党と日本の軍・警察との「共謀」が国際的スキャンダルにまでなったのが「カスペ事件」である。事件は次のような経過を辿る。1933年8月24日深夜、フランス国籍の若手ピアニスト、セミヨン・カスペがハルビンの路上で何者かによって誘拐されるという事件が起きた。セミヨンの父ヨシフ・カスペは、リットン調査団が宿泊したハルビン随一の高級ホテル「オテル・モデルン」経営者であり、富豪の父親から身代金を引き出すことを考えついたのは憲兵隊通訳のコースチャ中村という日本人であった。身代金交渉で犯人らはセミヨンの片耳を削いで父親に送りつけ、一方父親はフランス領事代理アルベール・シャンボンの指示のもとで身代金要求に応じず、独自の捜査で犯人特定とセミヨンの奪還を目指した。同年12月3日にセミヨンの惨殺死体が発見され、1934年10月、事件の容疑者としてロシア・ファシスト党員でハルビン警察庁刑事課巡査のマルティノフら6名が逮捕された。1935年6月からハルビン地方法院で裁判が開始され、翌36年6月にいったん死刑が宣告されながらも、白系ロシア人側の嘆願に基づき上訴、高裁は地裁判決を破棄し、1937年1月に全員が釈放された¹¹。

被害者セミヨンがフランス国籍であったために、「カスペ事件」はフランス領事館を巻き込み、国際的な反響を呼ぶ大事件となった。上海や欧米のユダヤ系新聞には事件の詳細が報道され、事件に関して外務省と在外公館とのあいだに情報交換や照会がなされたために、日本の外交文書にはこの事件に関する資料が残っている。

事件の実行犯であるロシア・ファシスト党の背後には、関東軍特務機関や憲兵隊が控えていた。ハルビンでは古くから「白系ロシア人」が警察機構内部で幅を利かせていたが、満洲国建国後、ハルビン特務機関や満洲国憲兵隊などの警察組織はロシア・ファシスト党を手駒として利用していた。ハルビン総領事の佐藤庄四郎が1936年9月19日にイギリス特命全権大使吉田茂宛に送った報告は、「ユダヤ人が他の民族より迫害を受けるのは世界全般にわたり認められるが、ハルビンでは特に深刻」と認め、その理由として、「取締官憲警察、憲兵隊、路警」に勤務する白系ロシア人が数百人に上り、彼らが「国土を失い、悲惨な流浪生活に呻吟」するようになった原因としてユダヤ人を仇敵視し、しかもその地位を乱用して反共産主義資金調達の名目で不法行為を行う「不良ロシア人」が多いこと、しかもそれを取り締まるべき日本人関係者にこの実情を看破する能力あるものが少ない

ため、と嘆いた¹²。一方長岡半六ハルビン領事代理から広田弘毅外相あての 1935 年 1 月 14 日付報告は率直にハルビンのロシア・ファシスト党によるユダヤ人迫害が、軍の公認下で行われている点を認め、そのうえで、ハルビン在住のロシア人のうち、少数派にすぎないユダヤ人に肩入れするような方針をとるのは、白系ロシア人を離反させることになり、統治上決して都合の良いものではない、との見解を明らかにしている¹³。これは「五族協和」や「民族協和」といった表向きの満洲国統治理念とは裏腹な、満洲統治の実態と本音を示しているといえる。

3-3. カスペ事件裁判

カスペ事件後、ロシア・ファシスト党の機関紙は、ユダヤ人とボリシェヴィキを結びつける中傷を一層強め、さらに 1934 年 11 月にはハルビン警察庁刑事課長の江口治が、事件の容疑者がソ連と通じるユダヤ人から活動資金調達のために犯行に及んだ「愛国者」である、とハルビンのロシア語新聞紙上で言明した¹⁴。それによれば、カスペ拉致殺害事件の被告たちは、ロシア帝国を滅亡倒壊させた共産主義者の中心勢力であるユダヤ人に対する報復の念のもとに、愛国主義的動機から犯行にいたった。江口は「気概を有する男子が亡国の民としてかかる環境におかれたる場合、目的のために手段を選ばず、期せずして法網にふるるに至るは其の例に乏しからず」と殺人者を擁護し、情状酌量を求めたのである¹⁵。

カスペ事件に対してハルビンのユダヤ人社会はどう対応したのだろうか。カスペの葬儀当日ハルビンのユダヤ系商店はすべて店を閉めて弔意を表した。葬儀の際に、カウフマンがおこなった演説は次のようなものであった。

「ユダヤ人は世界で最初に「汝殺すなかれ」という戒めを宣言した民である。われわれは復讐を求めてはいない。我々が求めるのは法による生命と財産の保護である。国家権力は平和を確立する義務がある。[日満]当局はユダヤ人にたいする憎悪を煽動して市民のあいだに不和の種をまく匪賊たちと戦い、一掃すべきである。」¹⁶

カウフマンのこの演説に対し、大連の日本語紙『満洲日報』は、アブラハム・カウフマンが街頭で「激烈な反満演説をするなど傍若無人の態度」をとっていると批判した。ハルビンの右翼紙もまた、カウフマンが「卑劣な犯罪を許し、住民を殺人者から保護しない当局の怠慢さ」に対し強く抗議の演説を行ったとした¹⁷。カスペ事件後、ハルビンユダヤ人社会の中心人物であったカウフマンが個人攻撃の対象となっていたのがわかる。対照的に、ハルビンのユダヤ系雑誌でカウフマンが主筆の『エヴレイスカヤ・ジーズニ（ユダヤ人の生活）』¹⁸にはカスペ事件に

関する報道や論評がみあたらず、カウフマンは沈黙を維持し続けた。被害者であるはずのユダヤ人が置かれた立場の危うさがかえよう。

警察も検察当局もカスペ殺人犯を「愛国者」として弁護するという異常な裁判の後、1936年6月13日、大方の予想を裏切ってハルビン地方法院の中国人裁判官は容疑者4人に対し死刑、2人に無期徒刑という厳しい判決を下した¹⁹。

判決直後の15日、ハルビンで日本当局が亡命ロシア人向けに創刊し、25,000部の発行部数があった日刊紙『ハルビンスコエ・ヴレーミヤ』は、カスペ拉致殺人犯をシュロモ・シュワルツバードによるペトリューラ暗殺事件と類比し、公正な裁判と「再審」を訴えた。

「カスペ事件の被告が政治的な動機によって犯行を実行したことは、ユダヤ系市民もよく知っている。シュワルツバード事件を覚えているユダヤ人は、本件でも政治事件に相応しい判決がでるものと予想していたのだ。したがってハルビンの全住民は近い将来再審が行われ、公正が勝利することを願っている。」²⁰

シュワルツバード事件とは、1926年にパリで発生したユダヤ人によるペトリューラ暗殺事件をめぐる裁判を指す。シモン・ペトリューラはロシア革命後の内戦期ウクライナで発生したボグロムの最大の責任者とされるウクライナ軍最高司令官であり、ボリシェヴィキに敗北後パリに逃れてウクライナ亡命政府の首班となった。ペトリューラは1926年に肉親をボグロムで殺されたユダヤ人青年、シュロモ・シュワルツバードによって暗殺された。1927年、フランスで行われた裁判ではペトリューラにボグロム責任があったと見なし、シュワルツバードは無罪となる²¹。復讐殺人を無罪としたシュワルツバード裁判はフランスの世論を二分し、その是非をめぐって国際的な反響をよんだ。日本当局の意志を代弁するハルビンの日刊紙『ハルビンスコエ・ヴレーミヤ』が、シュワルツバード裁判とカスペ誘拐殺人裁判とを結びつけて、再審と被告の無罪を主張したことは、常に反ユダヤ主義の論陣をはっていたロシア・ファシスト党による再審嘆願とは比較にならぬほどユダヤ人社会に与えた影響は大きかったと思われる。

それまで沈黙を続けていたカウフマンの声が聞こえるようになるのはこの時である。カウフマン²²は「セミヨン・カスペ拉致殺害事件実行犯に対する裁判が終わった。ならず者に判決が下された。4人が死刑、2人が終身刑に処せられ、匪賊に対する罰則が適用された。我々が今までカスペ事件にひと言も発しなかったのは、・・・裁判によって事件が詳らかにされ、正当な判決が出るのを待っていたからである」とハルビン地裁の判決を賞賛した²³。

カウフマンは、カスペ拉致殺人犯を英雄視する論調に対して次のように批判している。

「ハルビンの新聞には嘘と卑劣な中傷に満ちた意見が現れ、・・・殺人者が民族的英雄となり、裁判は政治的なものに転化した。カスペはコミンテルンの手先とされた。犯人たちはカスペを愛国心から誘拐した優れた闘士であり、犯行は罰ではなく、賞賛に値する行為であるというのである。・・・シュワルツバード事件とカスペ事件のどこに共通点があるのだろうか。シュワルツバードがペトリューラを暗殺したのは、ウクライナで 400 件のポグロムを起こし、20 万のユダヤ人を犠牲にした事に対する復讐だった。政治とは全く無関係の無辜のユダヤ人 [セミヨン・カスペ] を拉致することが・・・はたして英雄なのか、愛国者なのだろうか。ここにあるのはきわめて低い動物的本能ではないか。」²⁴

シオニスト修正主義青年組織「ベタール」の機関誌『ハ・デゲル』²⁵もまた、カスペ事件裁判に対し沈黙を守っていた。だが、同誌も「今やこの問題に関してユダヤ人が何らかの声明を出す必要性」がでてきた、と危機感をあらわにし、「誘拐し身代金を要求し、耳をそぎ落とし、殺し、お互いに罪をなすりつける匪賊」とシュワルツバードを比較することに抗議し、刑の厳粛なる執行を要求している²⁶。

ハルビンのユダヤ人社会は、カスペ事件裁判という危機を通して満洲国の実質的支配者である日本当局と対峙することになった。だが、彼らの抗議もむなしく 1936 年 6 月の死刑判決から間もなく高等法院は再審を命じ、1937 年 1 月、被告 6 名全員が恩赦となった²⁷。カスペ事件とその裁判の顛末は満洲国なるものの本質とその欺瞞性を如実に示すものであろう。

4. カウフマンの日本協力とその背景

カスペ事件の余燼がくすぶっていた 1937 年、カウフマンと日本とは急接近する。外務省資料は、この年春以降カウフマンが日本当局に対するそれまでの「敬遠的態度を急変」させ陸軍特務機関に接近し、カウフマンの発意によって「第一回極東ユダヤ民族大会」が開催されたとしている。「極東ユダヤ民族大会」は 1937 年 12 月、ハルビン、天津、大連、奉天、ハイラル、チチハル、神戸から 21 名のユダヤ人代表がハルビンに集まり、700 名の出席者を迎えて開催された。ここでユダヤ人側は日本と満洲国の国策に対する全面的な協力を宣言したのである。会議

は1939年12月まで3年連続で開催され、日本と満洲国における「人種平等」を賞賛、日本との協力を宣言し、これを欧米のユダヤ人社会に向けてアピールした²⁸。

日本側は日本および満洲国のユダヤ人統治の成功と「人種平等策」を内外に誇示するためにこの大会を積極的に对外宣伝し、カウフマンから日本の「ユダヤ人政策」に対する評価を引き出していった。従来の研究はほぼ例外なく、大会のイニシアチブは日本側（関東軍）にあったと見なしている²⁹。たしかに、日本側には統治下のユダヤ人社会を利用する積極的意思があった事は明らかである。日本側の意図としては満洲国への借款投資を促すための「ユダヤ利用論」があげられるが、それだけでなく、ユダヤ・カードを利用した対米関係の改善の可能性を重視したこと、さらにカウフマンのシオニストとしての指導力を利用し満洲国や日本、さらに天津、上海などのユダヤ人社会を一元的に管理することを目的としたものと考えられる。カウフマンの号令の下でハルビンのみならず、極東各地のユダヤ人社会が日本の国策に対する従順を表明した。大会に参加しなかった上海以外はアシュケナズ系（ロシア系）のユダヤ人を中心とするコミュニティであり、シオニストとして極東を代表する立場にあったカウフマンの人的ネットワークが生かされた。

これまで日本の資料に基づく研究の多くは日本の対ユダヤ人政策に重点が置かれ、日本占領下のユダヤ人社会は日本の政策の変化に翻弄される客体として取り扱われるのが常であった。だが、イスラエルの文書史料からは、ユダヤ人側の主体的動きが見えてくる。カウフマンは1945年、対日協力故にソ連に連行され、11年に及ぶラーゲリ生活を余儀なくされた。ソ連から晩年になってイスラエルへ移住を果たした後、1967年に満洲国時代に関するインタビュー（イディッシュ語）で戦前日本のユダヤ人政策と彼が果たした役割について答え、カウフマンは大会のイニシアチブはユダヤ人側にあったと主張した³⁰。ここでは最後にカウフマンが日本協力へと転向するに至る背景を考察したい。

カウフマンが1933年のカスペ事件以降、反ユダヤ主義が高まるハルビンからパレスチナへのユダヤ人の組織的移民を考え始めていたことを裏付ける興味深い史料がエルサレムの中央シオニスト文書館に残されている。それは1935年から36年にかけてのカウフマンとユダヤ機関（Jewish Agency）間の通信であり、この頃からハルビンとパレスチナ間でアリヤーとヴィザをめぐる実務的な通信が取り交わされるようになっていた。1935年11月5日付の書簡でカウフマンはパレスチナに次のように書きつづっている。

最近ソ連国籍者25,000人がハルビンを脱出した。出国した者のうち、ユダヤ人はおよそ1,000人である。商業は衰退し、ユダヤ人の経済的基盤は崩壊し

た。非常に多くの人々が出国を考えており、皆がパレスチナを第一に希望している³¹。

1935年中東鉄道がソ連から満洲国に売却され、それにともない鉄道従業員家族のソ連への帰国が開始された。大量の出国のため経済基盤が崩壊し、また家屋需要が減退したために不動産価格は4割も暴落した。こうしたなかで満洲国のユダヤ人のなかに、パレスチナへの出国を考える者が現れたのである。1935年11月5日付の「ユダヤ機関」宛書簡でカウフマンは、満洲国からの移民受入の可否を打診し、日本支配下の満洲国のユダヤ人の生活が、かつてのような平穏なものではなく、「こちらではパレスチナへの出国熱が日ごとに高まっている・・・ここでの生活条件は、ドイツのわが同胞のそれを彷彿とさせるものだ」と強調している³²。

カウフマンは具体的なヴィザ取得、特に多額の資本を必要としない手工業者向けA3種ヴィザに関する情報をユダヤ機関に求めた。だが、カウフマンの要求に対して、1935年12月31日付のパレスチナ・ユダヤ機関からの返答は「パレスチナへの移民の中心はワルシャワ、ベルリン、ブカレストである。現在ハルビンのユダヤ人がA3種ヴィザを使ってパレスチナに入国できる余地はない」というものであった。1933年以降、「ユダヤ機関」の移民受け入れ方針は、従来から移民の中心であったポーランドに加え、ナチ支配下のドイツ・ユダヤ人の吸収が最大の関心事となっていたのである。1935年の1年だけで、第一次大戦以前の30年間に匹敵する数のユダヤ移民がヨーロッパからパレスチナに到来した。だがハルビンへの割り当てはなかった。ハルビン出身のイツハク・オレンは「ハルビンのようなユダヤ人ディアスポラのなかでも忘れられた辺境の地には、ほんの僅かの許可書が届いただけだった。東欧とドイツのユダヤ人の災難の前には、我々のような豊かなコミュニティに対して気前の良さを発揮するわけにいなかった」と回想している³³。

パレスチナへの移住の可能性はその後さらに狭まっていく。1936年4月には大量のユダヤ移民に反発するパレスチナアラブ人の暴動が発生、イギリス委任統治当局はユダヤ人の移民制限へと政策を転換した。しかも1937年夏には日中戦争が勃発し、それまでハルビンからの移住先となっていた天津や上海のユダヤ人社会も日本の占領下に置かれることになる。

以上のように1930年代後半のハルビン・ユダヤ人社会は、パレスチナへの出国もかなわず、出口のない状況に置かれていた。カウフマンは日本に協力し、日本の「ユダヤ利用論」を積極的に利用することで満洲国や日本占領下のユダヤ人社会の安全を図ったのである。

1939年5月、日本政府はカウフマン夫妻³⁴を日本に招待した。カウフマンは大

阪、京都、名古屋、東京、鎌倉、日光を巡歴、陸軍省、外務省を訪問し、アメリカユダヤ人の対日感情改善を外務省に報告した。各地を見聞した後カウフマンは「余が痛感せることは日本がその国土があまりに狭小に過ぐる点なり、日本の大陸発展は必然性を有する」と日本当局者に向けて語ったという。一方特務機関はカウフマンの訪日をユダヤ人工作上大きな意義があったと結論づけている³⁵。

5. 終わりに

ロシア革命後のハルビンには極東ロシア最大のユダヤ人人口が集中し、日本が実質的に統治する満洲国の時代になっても数千人に達する結束の強いユダヤ人共同体が存在した。日本本土ではナチス・ドイツに影響された「ユダヤ陰謀論」や「国際秘密力」なる言論が賑わっていた1939年、大連の満鉄調査部は、「在哈爾浜ユダヤ人公認の指導者カウフマン博士のユダヤ人社会に対する勢力は、いかなる個人もしくはグループでさえも対抗できないほど圧倒的」であり、その限りではハルビンには「いかなる秘密のユダヤ人本部」も存在しえない。また、反ユダヤ主義者が脅威に思うほど、ユダヤ人が統一されていないのは、上海のユダヤ人の分裂状況をみればわかる」と観察し、陰謀論を疑問視している³⁶。しばしば日本の反ユダヤ主義は「ユダヤ人不在の反ユダヤ主義」と形容されるが、ハルビンにおける現実のユダヤ人社会の存在は、日本人のユダヤ人認識に一定の影響を及ぼしたのである。

注

- ¹ 日本人のユダヤ認識と反ユダヤ主義の歴史については、特に以下を参照。宮澤正典『増補ユダヤ人論考』新泉社、1982年、同『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1877～1988』、新泉社、1990年。David G. Goodman, Masanori Miyazawa, *Jews in Japanese Mind: The History and Uses of a Cultural Stereotype*, New York: The Free Press, 1995.
- ² David Wolff, *To the Harbin Station: The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898-1914*, Stanford University Press, 1999.
- ³ 日露戦争では全国で約7万のロシア兵が捕虜として日本各地に収容された。ロシア軍内部の民族的反目を知る収容所側は、ユダヤ人やポーランド人を区別して収容したが、捕虜のなかからは全国で1万に上る日本への帰化申請があったという。(才神時雄『松山収容所 捕虜と日本人』中公新書、1969年、52頁。)当時の日本の雑誌は「自分は猶太人なるが露国の兵制として下士はいかに功勳をたつるも将校たるあたわざるに失望し、またこの戦争の我にとりてあまりにばかばかしと平生考えつつありをもって投

- 降するにいたりし」というユダヤ人兵士の言葉を同情しつつ紹介している「猶太人の露兵投降」『戦時画報』第38号、1905年、90頁。
- ⁴ Abraham I. Kaufman, “Poselok Kharbin,” *Biulleten' Igud Iotzej Sin*, No.296, 1988.
- ⁵ 収容所体験を綴った自伝『ラーゲリの医師 (Lagernyj vrach)』(テルアビブ、1973年)の他にも、カウフマンは多くの回想を書き残している。彼が生まれてからハルビンに移住する前のロシア本国とスイス留学時代(1885年～1911年)を回想した『我が人生のページ (Listki iz moej zhizni)』、そしてハルビン時代を扱った『居留地ハルビン (Poselok Kharbin)』である。だがハルビン時代の回想は1933年の「カスペ事件」(後述)の記載で終わり「未完」とされているハルビン時代の回想は極東出身ユダヤ人の親睦組織である「イグード・ヨツェイ・シン(中国出身者協会)」(会長はカウフマンの息子テディ・カウフマン)が発行するロシア語版『ビュレティン』に、1987年12月から1998年4月まで連載された。ロシア時代の回想は1998年2月から2006年まで連載された。中国の檔案館(文書館)に残るとされるハルビンのユダヤ共同体の資料は未公開であるが、テルアビブの「元中国出身者同盟 (Igud Yotsei Sin)」、エルサレムのヤド・ヴァシェム、中央シオニスト文書館、そして我が国の外交史料館などにハルビンのコミュニティやカウフマンに関わる資料が存在する。
- ⁶ 拙稿「シベリア出兵と『シオン議定書』の伝播 1919-1922」『ユダヤ・イスラエル研究』27号、2013年12月、23-36頁。
- ⁷ John Stephan, *The Russian Fascists: Tragedy and Farce in Exile, 1925-1945*, London: Hamish Hamilton, pp.48-59.
- ⁸ Kaufman, “Poselok...,” *Biulleten'*, No.350, 1997.
- ⁹ Boris Bressler, “Harbin’s Jewish Community, 1898-1958: Politics, Prosperity, and Adversity,” in Jonathan Goldstein ed., *The Jews of China*, vol. 1 Historical and Comparative Perspectives, M.E. Sharpe, New York, 1999, p.209.
- ¹⁰ 「在哈猶太人の状況」、内務省警保局『外事警察報』第199号、1939年、118頁。
- ¹¹ John Stephan, *op.cit.*, pp.81-89.
- ¹² アジア歴史資料センター(以下JACARと略)「民族問題関係雑件／猶太人問題 第3巻 (I-4-6-0-010)」。
- ¹³ 同上。
- ¹⁴ 中嶋毅「カスペ事件をめぐる在ハルビン・ロシア人社会と日本」『人文学報』2014年3月、44頁。
- ¹⁵ JACAR、Ref.B04013204500、「民族問題関係雑件／猶太人問題 第3巻 (I-4-6-0-010)」(外務省外交史料館)。江口の発表文に対してはソ連総領事も反ソ活動を助長するものとして抗議している。
- ¹⁶ Kaufman, “Poselok...,” *Biulleten'*, No. 353, 1998.
- ¹⁷ 『満州日報』昭和8年12月8日付。
- ¹⁸ 同誌は発行部数450部、ハルビン市内の他、満洲国各地やパレスチナなど海外にも購読者がいた。前掲「在哈猶太人の状況」128頁。
- ¹⁹ John Stephan, *op.cit.*, p.166.

- ²⁰ *Kharbinskoe vremia*, 15 June, 1936. 同紙は 1931 年 11 月に発刊したロシア語日刊紙である。ハルビンのロシア人世論を日本に有利に導く目的で発行された。
- ²¹ Yohanan Petrovsky-Shtern and Antony Polonsky, “Introduction,” *Polin: Jews and Ukrainians*, vol. 26, Oxford, 2014, pp.28-29.
- ²² 記事は Nemo (沈黙) という匿名で書かれている。後にカウフマンは回想でこの論文を載せたのは自分であると記している。Kaufman, “Poselok...,” *Biulleten’*, No.353, 1998.
- ²³ *Evrejskaia zhizn’*, 25 June, 1936, p.8.
- ²⁴ *Ibid.*
- ²⁵ 『ハ・デゲル (旗)』は隔週刊の雑誌であり、ハルビンのユダヤ青年同盟「ベタール (ブリット・トルンペリドール)」会長のグレヴィチ (A. Y. Gurevich) が 1932 年に創刊した。
- ²⁶ *Ha degel*, 26 June, 1936. それまで沈黙していた理由を同誌は「基本的にシオニストはパレスチナにおけるユダヤ人国家建設のみに集中すべきである」と説明している。
- ²⁷ 中嶋毅によれば、カスペ事件で実行犯全員が釈放されたのは、ロシア・ファシスト党と憲兵隊、特務機関が「共犯」関係にあり、日本側としては「忠実な協力者を失うだけでなく、自らの悪事が暴露」する危険をなんとしても避ける必要があったからである。中嶋、前掲論文、56 頁。
- ²⁸ JACAR, Ref.B04013204800、「民族問題関係雑件／猶太人問題 第 3 卷(I-4-6-0-1_2_003)」。
- ²⁹ Avraham Altman, “Controlling the Jews, Manchukuo Style,” in Roman Malek ed., *Jews in China*, (Sankt Augustin, 2000), pp.279-317.; Boris Bresler, “Harbin’s Jewish Community, 1898-1958: Politics, Prosperity, and Adversity,” in *The Jews of China*, vol. 1 (M.E. Sharpe, 1999), pp.200-215.; David Kranzler, “Japan before and during the Holocaust,” in David S.Wyman ed., *The World Reacts to the Holocaust* (The Johns Hopkins University Press, 1996), pp.554-572.; 丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』法政大学出版局、2005 年；阪東宏『日本のユダヤ人政策 1931-1945』未来社、2002 年。
- ³⁰ Yad Vashem Archives, 06/3168. ある研究はこうしたカウフマンの主張にたいし、カウフマンは関東軍に利用されたということに「本当に気付かなかったのか。それとも、彼とハルビン・ユダヤ人社会に都合の良い過去を作り上げようとしたのだろうか」といふかっている。Altman, “Controlling the Jews...,” p.317.
- ³¹ Central Zionist Archives, Jerusalem, S6/3809.
- ³² パレスチナのユダヤ機関とカウフマンの通信をめぐる詳細は、拙稿「アブラハム・カウフマンとハルビン・ユダヤ人社会：日本統治下ユダヤ人社会の一断面」『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア (III)』北海道大学スラブ研究センター、2006 年、47-58 頁を参照。
- ³³ Itzhak Oren, “Studencheskij sertifikat,” *Biulleten’*, No. 352. イスラエル作家のオレンはシベリアで 1918 年に生まれ、ハルビンで育った。1936 年にヘブライ大学で教育を受けるためパレスチナに移住した。
- ³⁴ JACAR, Ref.B04013207200、「民族問題関係雑件／猶太人問題 第 7 卷」(外務省外交史料館)。来日したカウフマンの妻を「高橋満」という名の日本人女性とする資料や説が

ある。例えば安江弘夫『大連特務機関と幻のユダヤ国家』八幡書店、1989年、155-156頁には、「(1939年)5月2日、カウフマンが日本人妻(旧姓高橋)満を同伴してハルビンを出立」とある。だが、1939年6月1日の駐大連弁事所長の報告によれば妻の名前はエステル・カウフマン(Esfir D. Kaufman 1902-1984)である。(エスフィールは「エステル」のロシア語読み。)カウフマンは最初の妻が死去後、1933年にベッサラビア出身のユダヤ人のエスフィール・ダヴィドヴナと再婚した。(『哈爾濱猶太簡明辞典』(*The Concise Harbin Jewish Dictionary*) Harbin, 2013, p.252.)なぜ日本人妻説が生まれたのか興味深いが、カウフマンの漢字名が「高福満」であったことからくる誤解かと推測される。

- ³⁵ この際カウフマンに同行したロシア語通訳は満鉄調査部特別調査班の「ユダヤ問題専門家」の小山猛夫である。小山は欧米の反ユダヤ主義を批判し、「大東亜共栄圏」構想のためにユダヤ人を「掌握、指導し、協力させる」よう我が国独自の方策を主張した。前掲宮澤『増補ユダヤ人論考』197頁。
- ³⁶ 満鉄調査部『在哈猶太人及猶太系機関ノ最近事情』猶太問題調査資料第17輯(昭和14年)。